研究ノート

高齢者のイメージに関する文献研究
–一般高齢者と認知症高齢者に対するイメージ–

奥　村　由美子
川崎医療福祉大学　医療福祉学部
久　世　淳　子
日本福祉大学　情報社会科学部

A review of reseach findings on image of the elderly
– Image of the general elderly people and the elderly with dementia –

Yumiko Okumura
Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare
Junko Kuze
Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: 高齢者，イメージ，認知症，介護

1．はじめに

我々は，さまざまな年代の人々とともに社会において共存しているが，これまでにないスピードで高齢化が進むにつれて，高齢者への理解を深める必要性がより一層高まってきた．また，厚生労働省の推計によると，介護認定を受けた高齢者について，何らかの介護や支援を要する認知症高齢者（認知症老人自立度Ⅱ以上）は2002年では約150万人で，さらに，2015年までには約250万人に増加するといわれており（2003年6月高齢者介護研究会報告書より），認知症高齢者の介護の質の向上がさらにのぞまれるところである．

高齢者に対して他の世代がどのような認識をもっているかをあらわす「高齢者観」の中でも，とくに高齢者のイメージについては多くの研究がなされてきた．それらは主に，一般的な高齢者に対して児童や生徒，学生がどのようなイメージをもっているのかが検討されたものである．しかし，成人期など，より年齢層の高い世代のもつ高齢者のイメージに関してはほとんど検討されていない．たとえば高齢者の介護には，成人期にある様々な専門職が，より質の高い介護を目指して日々取り組んでいる．また，近年増加している認知症高齢者の介護においては，それにかかわる専門職の認知症高齢者に対するイメージの違いが，介護・介入の姿勢や介護におけるストレスに影響を及ぼす可能性があるが，現段階では認知症高齢者のイメージに関する研究はまだ十分なされていない．

我々は，様々な世代が高齢者への理解を深めるための教育のあり方を検討するために，加齢および高齢者に関する知識とイメージの測定方法の検討を行なうこととし

た．そこで本稿では，高齢者の一般的なイメージとともに，高齢者および認知症高齢者にかかわる専門職および学生がもつイメージに関する先行研究から，イメージの形成に関連する要因を検討する．

なお，先行研究では高齢者についての認識は，高齢者（老人･老年）観，イメージ，態度などについて検討されているが，本稿ではイメージについての文献検討を中心に行う．また，対象については高齢者，老人，老年者など用いられる語が様々であるが，本稿では高齢者として統一する．

2．高齢者イメージに関する研究

2.1　SD 法によるイメージ測定

2.1.1　青年期のおける高齢者イメージ

高齢者のイメージ研究では，まず青年期にあたる大学生を対象に，Semantic Differential 法（SD 法）によるものが多くみられる．

保坂ら[1]は，大学生を対象に高齢者のイメージを，「明るい－暗い」，「きれい－きたない」，「積極的－消極的」など 10 項目の形容詞対を用いて測定している．この形容詞対は，研究の目的に直接的･具体的な情報を提供してくれそうなものという基準により選定されたものである．同時に，「高齢者と近づきになりたいと思いますか」，「高齢者は社会の役に立つと思いますか」などの５つの質問から，高齢者観についても検討されている．794 名についての分析から，大学生のもつ高齢者イメージは，肯定的な側面では「あたたかい」，「やさしい」，否定的な側面では「弱い」，「頑固」などであった．また高齢者観については，「今の高齢者はもっと大切にされるべきだと思いますか」，「高齢者は社会の役にたつと思いますか」という質問に「（やや）そう思う」という回答が多いが，その一方で，「高齢者と近づきになりたいと思いますか」という質問には「何ともいえない」という回答が多いなど，好意的，あるいは同情的な高齢者観とともに，否定的な側面が認識され，一定の距離をおいて接したいという態度がもたれていることが示された．これらの結果には，大学生の「高齢者と話す機会」や，「高齢者や高齢者問題に対する関心」が関連するとされたが，「祖父母との同居経験」そのものは有意な関連は認められなかった．

さらに保坂ら[2]は，先の研究を拡大，充実させた「大学生の高齢者･老後観に関する調査」という研究において，大学生 567 名の，高齢者に対するイメージの検討を行っている．この研究では，先の研究と同様にイメージは SD 法により測定されているが，イメージをより正確にとらえるために項目は 10 項目から 50 項目に増やされ，さらに因子分析によりイメージをとらえることが試みられている．同時に，「高齢者･高齢者問題への接触と認知」や「祖父母との同居経験や接触頻度など」などについても調査されている．その結果，大学生の高齢者に対する主なイメージは否定的なもので，それは「弱い」，「非生産的」，「遅い」などであった．一方，肯定的なイメージとしては，「あたたかい」，「優しい」などがあげられた．因子分析によって「有能性」，「活動･自立性」，「幸福性」，「協調性」，「温和性」，「社会的外向性」の６因子が抽出され，中でも能力に関連する「有能性」(知恵や人格といった精神面における評価)，「活動･自立性」（活動的であるか否か，働いて自立する能力があるか否かといった肉体面における評価）が重要な因子とされた．しかし，このように評価されていながらも，学生が高齢者の価値を積極的に見出そうとしたり，高く評価しているわけでもないことも同時に指摘されている．一方で，「温和性」のイメージは，肯定的な高齢者像としての強い存在を示していた．また，イメージに関連する要因は，先の報告と同様に「高齢者や高齢者問題への関心」や「高齢者とのかかわる機会」であって，「祖父母との同居経験」はそれ自体あまり重要な規定要因ではないことも指摘された．これらの結果をふまえて，今後さらに業績達成主義や能力主義が強まると，高齢者の「有能性」や「活動･自立性」のイメージはますます否定的なものになることや，逆に高齢者の存在を見直すようになれば，そのイメージはより肯定的な報告に近づくのではないかと指摘されている．

高齢者のイメージが，その特質によって評価が異なるという点については古谷野[3]も，大学生を対象とした調査結果から，高齢者の「内面的なあたたかさ」に比べると「外見の活発さ」は否定的に評価されることを指摘しており，大学生に共通する傾向であると考えられる．

これらの検討から，青年期にあたる大学生の高齢者へのイメージは，おおむね否定的な傾向にあるが，着目する側面によってその評価が異なること，また，イ

メージの形成には学生が個々に経験してきた高齢者とのかかわり体験が関連することなどが示されているといえる．

2.1.2　青年期以前の段階における高齢者イメージ

個々の高齢者とのかかわり体験という観点では、青年期以前の高齢者イメージやイメージに関連する要因を検討する必要がある。

青年期以前の段階での高齢者イメージについては，中野ら[4]が小･中学生を対象にSD法による高齢者イメージを測定している．1822名の回答についての主成分分析から，Evaluation（評価）とActivity（活動性）という２成分が抽出された．小学生と中学生の比較では，小学生はいずれのイメージについても肯定的に評価していたものの，中学生は，「活動性」について否定的に評価していた．イメージに影響を与える要因には，「学年」と「高齢者との過去の経験」があげられた．学年別では，低学年ほどイメージは肯定的で，高学年ほど否定的であることや，幼いときの高齢者との交流経験が多いほどイメージが肯定的であることが報告された．

中学生の高齢者観に限っては馬場ら[5]が，中学生996名を対象とした検討から，性別や年齢はほとんど影響せず，高齢者との交流が多い中学生ほど肯定的な高齢者観を抱いていることを指摘した．この検討はイメージではなく，25項目からなる「高齢者観スケール」による検討ではあるが，中学生の，高齢者のとらえ方を明示しているといえる．

先述の中野らの報告では，小学生が高齢者に肯定的なイメージをもっていることが示されたが，その高齢者との関係性の違いという点ではたとえば遠近[6]が，自分の祖父母と，祖父母以外の一般高齢者へのイメージを比較している．その結果，自分の祖父母に対しての方が，祖父母以外の一般の高齢者に対するよりも肯定的なイメージをいだいていることを指摘した．また金田[7]は，学童保育を利用している小学生を対象に，「一日の生活時間」，「生活圏について」，「自分の祖父母について」，「大人･お年よりってどんな人」という４項目を中心とした半構造化面接を行っている．その結果，子どもにとって身近でよく理解できる関係にある「祖父母」は，「○○してくれる」存在であり，「嫌い」をはじめとするマイナスの感情やイメージが少ないことが報告された．この点については，逆に，かかわりや接触頻度が極端に少ない子どもは，高齢者について自分の祖父母と一致しておらず，理解できていないのではないかと考察されている．また「大人やお年より」については，まずは大人をイメージするときに自分の父母をあげ，「大きい」，「背が高い」などの外見的特徴があげられていた．高齢者については学年を問わず「小さい人」，「杖をついている」などがあげられ，さらに低学年では「おじいちゃん，おばあちゃん」のほかに，「元気でない」，「死んでいく人」，「弱そう」といったマイナス的なイメージがもたれていた．その一方で，高学年では「子どもに対して優しい人」，「昔のことを良く知っている人」というプラス面をとらえているなど，学年の変化によりとらえ方が変化することが報告された．

これらの検討から，青年期以前の時期においては，高齢者のイメージは比較的肯定的でありながら，イメージの形成には高齢者との交流経験が関連すること，また学年の違いによりイメージが変化する可能性があることが示されていた．同時に，イメージには高齢者への理解度が関連する可能性もうかがえた．

2.1.3　成人期における高齢者イメージ

古谷野ら[8]は，SD法による高齢者イメージ研究の多くが児童や生徒，学生を対象としたもので，高齢者イメージにみられる年齢差（世代差）を検討するための資料は著しく不足している点を指摘した．そこで，45 - 64歳の565名の回答について高齢者へのイメージを検討した．この研究では，イメージは保坂ら[1]，古谷野[3]の報告をふまえて，「消極的な－積極的な」，「不活発な－活発な」，「暗い－明るい」などの一般的な形容詞対20対を用いて測定されている．このうち２項目は，信頼性の確認のために左右を入れ替えた同一内容の形容詞対であったため，その重複項目を除く19の形容詞対について因子分析が行われた．その結果，「力動」，「洗練」，「親和」という３因子が抽出された．この３因子による比較では，中高年齢者のもつ高齢者イメージは全体として中立的で，中立点よりわずかに肯定的な方向に偏っていたことが示された．また，成人を対象とした検討がきわめて少ないとした上で，先行研究の結果もふまえて，幼児には肯定的であった高齢者イメージが青年期にもっとも否定的になり，その後に肯定的な方向に変化する可能性を指摘した．さらにそのような変化は，価値意識の加齢変化に求めるこ

とができるかもしれないとも考察している．同時に，同じ SD 法によるイメージ測定であっても，用いる形容詞対が異なることによって，高齢者イメージの知見が一致しないこととともに，保坂らによる，類似する特質をもつ因子の次元から，高齢者イメージが大学生の時期から中高年期にわたって，おおむね維持される可能性を指摘している．

2.1.4　高齢者との接触時期と頻度がイメージに与える影響

遠近の報告[6]での，小学生の時期にすでに高齢者へのイメージに差が認められることをふまえて，久世[9]は高齢者との「現在の接触経験」よりも「過去の接触経験」が，高齢者のイメージに影響を与える可能性を指摘している．

久世[9]は，大学生を対象に，「あかちゃん」，「こども」，「おとな」，「おとしより」という４つの単語に対するイメージを SD 法により測定し，高齢者との接触経験については，「祖父母との同居経験」，「小学校入学以前・小学生・中学生・中学校卒業以後・現在の５つの時期の祖父母との接触頻度」，「高齢者との接触頻度」を調査した．イメージ項目の因子分析の結果，「評価」，「円熟性」，「強度」の３因子が抽出された．この３因子のうち，高齢者については「強度」の因子がもっとも否定的に評定されていた．接触時期や頻度との関連では，「評価」には「小学校入学以前」および「小学校」の時期に祖父母と毎日接していた者の方が，接触頻度が週１回以下の者より高齢者を高く評価していた．一方で，「強さ」の因子に関しては，現在（調査時）に毎日高齢者と接していた者の方が，接触頻度が週１回以下の者より弱いイメージを高齢者にもっていた．この結果については，高齢者のイメージが現在の頻繁な高齢者との接触によって，のろくて弱々しいものになることを指摘した。さらに木村[10]による，「壮年期では高齢者と同居していない者の方が同居している者よりも老いの特性を肯定的に受け止めている」という報告をふまえ，同居する高齢者が自分の父母の場合と祖父母の場合，あるいは一般の高齢者の場合で，高齢者イメージに与える影響が異なる可能性が否定できないと考察している．

これらの検討では，イメージの形成に関連するとされる高齢者との交流経験については，その頻度によって，あるいは関係性やかかわり方によって，もたらされる影響が異なる可能性が示されている．

３．専門的に高齢者にかかわる職種および学生のもつ高齢者のイメージ

久世[9]は，ある年齢の人々が，自己とは異なる年代の人々に抱くイメージは，彼らの行動に影響を与えると同時に，行動の結果によっても，新たなイメージが形成されると指摘する．また，高齢者にかかわる専門職にすでに就いている者，あるいはこれから就こうとする者が自己の高齢者イメージについて知ることは重要であり，近年では，看護師や介護福祉士といった高齢者にかかわる専門職や専門職を養成する過程での，高齢者イメージの研究が散見されるようになってきた．

これまでの高齢者イメージ（高齢者観）の研究は，とくに援助という側面に関しては限られているものの，たとえば「専門職が肯定的な高齢者観をもつ場合にはサービスの質は向上し，また否定的な高齢者観をもつ場合にはサービスの質は低下する[11,12]」とされている．さらには，否定的な高齢者観をもつ専門職は，介護場面において怒りや敵意などの感情を表出したり，共感性に乏しい態度をとるという報告[13,14]もあり，高齢者の介護にかかわる専門職が高齢者に対して肯定的なイメージをもっていることの重要性を示唆するものであると考えられる．

近年増加している認知症高齢者への介護には，様々な専門職がより質の高い介護を目指して日々取り組んでいるが，認知症介護においても，それにかかわる専門職の認知症高齢者に対してもつイメージの違いが，介護・介入の姿勢や介護におけるストレスに影響を及ぼす可能性がある．

看護の分野においては，高齢者の看護が看護するものの高齢者観に左右されるという観点から，高齢者への認識について積極的に検討されている．大塚ら[15]は，看護学生 68 名に対して 15 項目からなる形容詞対による SD 法と描画を用いて，高齢者のイメージを測定している．SD 法による結果では，全体的に肯定的イメージがもたれており，そこには「祖父母との会話の頻度」が関連していた．また描画においては，「白髪・しわのある高齢者」が７割以上の学生において描かれていた一方で，SD 法で「さっそうとしている」と評価した学生は，描画においても活動的な高齢者を描いたことが報告されている．同時に，高齢者看護では，生活の援助が中心となることから，高齢者への抽象的なイメージだけではなく，

生活についてなど具体的なイメージを把握することの必要性も指摘されている．

奥村ら[16]は，老人病院に入院する認知症高齢者の介護に関わるスタッフ26名を対象に，認知症高齢者にどのようなイメージを抱いているのかを調査し，スタッフの認知症介護における経験年数やこれまでの高齢者とのかかわり度合いとの関連を検討した．イメージ調査項目は，認知症高齢者の状態をとらえやすくすることを目的に，SD法ではなく，「意欲的である－意欲的ではない」，「物事や周囲への関心が高い－物事や周囲に無関心である」，「感情表現が豊かである－感情表現が乏しい」などの９項目を設定した．そして，各項目について６段階での回答をもとめ，数字が大きくなるほど肯定的なイメージを抱いているように得点化した．その結果，いずれの項目についても，回答の平均値では，やや否定的な傾向が示された．認知症高齢者のイメージと，職種，高齢者との同居経験の有無，同居した時期とはいずれについても関連はみられなかった．さらに同居経験がある場合には，介護経験の短い群が，同居経験があり介護経験の長い群よりも，意欲や感情表現の豊かさについて肯定的なイメージを抱いていた．このことから，成長期に形成された高齢者へのイメージが，業務についてからも短期間は維持される可能性を指摘したが，同時に，介護経験が長くなると，イメージは否定的に変化する可能性も指摘している．さらに，老人病院において認知症高齢者の介護にかかわる専門職185名に対して，同様のイメージ項目による調査を行い，因子分析により抽出した「思慮深さ」，「積極性」の２因子を用いて，年齢や経験年数などとの関連が検討された[17]．内面的側面への理解をあらわす「思慮深さ」については，年齢が高く介護経験の長い群が，年齢が低く介護経験の短い群よりも肯定的イメージを抱いていた．さらに，イメージがある年齢を境として変化することや，抱きやすいイメージの特徴が変化する可能性も指摘された．

奥村らの報告では，介護にかかわってからの短期間はイメージが維持される一方で，介護経験が長くなると否定的になる可能性を指摘している．その要因としては，介護業務においては，本来その高齢者が保持しているはずの能力や人格が発揮される側面ではなく，認知症による能力の低下に起因する日常での様々な支障に多く直面するなど，業務の忙しさや認知症高齢者へのかかわりの難しさなどによるのではないかと考えられる．同時にそれは業務意欲の低下をきたし，業務に従事して間もなくの時期に退職を考えることなどにつながるのではないかと考えられ，より早期に認知症高齢者の良い側面に気づき，日常業務の意欲を高めることのできる教育や機会が必要であると考えられる．

高齢者と密接にかかわることによって高齢者への認識が肯定的に変化することについては，たとえば，実習記録や実習後レポートの分析から，看護学生が実習における高齢者とのふれあいを通して高齢者へのイメージが肯定的イメージに修正できたこととともに，早い学年で実習を実施することの有効性が報告されている[18,19]．また松本ら[20]は，高齢者の多い病棟に勤務する看護職に対する意識調査を行っている．その結果，学生期の学習よりも卒後，高齢者に密着してケアの体験を重ねることにより，高齢者の自立について，身体的な自立よりも精神的自立に着目できるようになり，その人自身の気持ちにより添うことを優先的に考えられるようになる可能性を指摘している．このことからも，高齢者への理解を深めるには，より身近に落ち着いた状況でかかわることの必要性が示唆されている．

介護スタッフがかかわる高齢者へのアプローチとしては，にぎやかな楽しい時間を過ごすための様々なアクティビティと共に，より心理的側面への効果に焦点をあてた非薬物療法がある．リアリティ・オリエンテーションや回想法などを組み合わせたアプローチにかかわったスタッフが，高齢者への理解を深めたり[21]，モラールを高めたという報告[22]がある．たとえば，回想法は，認知症高齢者の感情に焦点をあてたアプローチであり[23]，認知症高齢者の情緒的安定とともに，他者との交流の円滑化や新たな環境への適応[24]なども期待できる．さらには，実施にかかわる介護スタッフが，認知症高齢者の日常とは異なる新たな側面に気づき，理解が深まるというような効果も期待できるものと考えられている[24,25]．

Okumuraら[26]は，病院，特別養護老人ホーム，老人保健施設，グループホームなどにおいて認知症高齢者の介護に関わるスタッフ163名について，認知症高齢者への回想法グループにかかわる群，日常会話グループにかかわる群，通常業務のみにかかわる群という３群を設定した．そして，グループ実施前後に，先述の９項目を用いて，認知症高齢者および健常高齢者のイメージの変化を調査した．イメージ項目については因子分析により抽出された「能動性」と「円熟性」という２因子により比

較され，回想法グループにかかわったスタッフにおいてのみ，認知症高齢者の内面性をあらわす「円熟性」について肯定的な変化が認められた．「円熟性」は認知症高齢者においては，短時間の表面的なかかわりでは気づきにくいものであり，より個人の生活史にもふれることができる，じっくりとかかわる回想の場面であるからこそ気づかれたと考えられる．また，参加者の，日常生活の場面では見られないような態度や高齢者間で展開される会話から，認知症高齢者が持つ秘めた能力を再認識することができたのではないかと考えられる．

認知症についてのとらえ方や理解は，認知症についての知識量による可能性が指摘されている[27,28]．認知症高齢者のイメージには，認知症による症状が関連する可能性が高いとも考えられ，認知症についての認識とイメージとの関連を検討することも必要であると考えられる．

奥村ら[29,30]は，医療福祉系大学で学ぶ大学生を対象に，認知症高齢者および健常高齢者のイメージを調査した．イメージ項目は，保坂ら[3]による50項目の形容詞対，奥村ら[16]による9項目に，さらに本間[27]，杉原ら[28]による認知症に関する認識の13項目からイメージを測定する「歳をとると多かれ少なかれみんなぼけるので，病気とは思わない」，「誰もがなる可能性がある」，「身近に感じられる」などの9項目を加えた．その結果，認知症高齢者と健常高齢者とでは，健常高齢者に対して有意に肯定的イメージがもたれている傾向があった．認知症高齢者へのイメージには，親や祖父母の態度，および祖父母とのかかわりが肯定的に影響している可能性が示された．また認知症に関する知識が少ない方が肯定的なイメージをもっていたが，高齢者に関するボランティア活動の経験がある場合には，経験がない場合に比べて肯定的イメージを持っている傾向も示された．このことから，知識だけではなく,実際にかかわることによって肯定的なイメージがうまれる可能性も示された．今回分析対象とした学生は，実際に認知症高齢者にかかわったことがほとんどなく，イメージには，認知症高齢者について具体的にとらえにくいことも影響していると考えられる．また，健常高齢者に関しては，高齢者のことを身近なこととして感じるかどうかについて，親と祖父母との間の何らかの要因が影響して，現実感に違いがうまれるのではないかということも示唆された．

4．まとめ

本稿では，高齢者および認知症高齢者のイメージに関する先行研究を検討した．その結果，高齢者イメージには，高齢者との交流経験やその頻度とともに，関係性やかかわり方などが関連することや，親や祖父母の態度からも影響を受ける可能性が示唆された．さらに，幼児期の高齢者イメージが比較的肯定的でありながら，青年期には否定的になり，その後に再び肯定的な方向に変化する可能性も指摘された．さらに高齢者の介護にかかわる専門的な職種や学生での調査では，比較的否定的なイメージがもたれていた．

また，認知症高齢者と健常高齢者ではイメージは異なり，健常高齢者に対する方が肯定的なイメージがもたれていた．しかし，実際のかかわりの中で，知識だけではなく高齢者の肯定的な側面を知る機会を持つことで，イメージが肯定的に変化する可能性が示されていた.また，とくに実際の援助を目指した方向性においては，抽象的なイメージだけではなく，具体的なイメージについて検討することの必要性も示されていた．

これらのことから，高齢者のイメージについては，高齢者との交流について，高齢者や高齢者にかかわる人を含めた関係性の中から受ける影響について，発達段階における諸要因を含めて具体的に検討する必要があることが考えられた．さらに，看護･介護といった援助の視点においては，専門的知識とともに，生活上の様子をとらえられるような具体的な表現を盛り込んだイメージ測定方法を検討する必要性が示された．

謝辞

本研究は，平成19年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C)「加齢および高齢者に関する知識とイメージを測定するテストの開発」（代表者：奥村由美子）の助成を受けて行った．記して深謝します．

引用文献

1）保坂久美子，袖井孝子：大学生の老人観．老年社会科学 ,8,pp.103-116（1986）
2）保坂久美子，袖井孝子：大学生の老人イメージ - SD法による分析 - ．社会老年学 ,27,pp.22-33（1988）
3）古谷野亘：通年講義による老人観の変容；専門科目「老人福祉論」の場合．桃山学院大学社会学論集 ,23(2),pp.1-19（1990）

4）中野いく子，冷水豊，中谷陽明，馬場純子：小学生と中学生の老人イメージ-SD 法による測定と比較-．社会老年学 ,39,pp.11-22（1994）
5）馬場純子，中野いく子，冷水豊，中谷陽明：中学生の老人観 - 老人観スケールによる測定 -．社会老年学 ,38,pp.3-12（1993）
6）遠近三和子：小学生の高齢者に対するイメージ - 自分の祖父母と“ふつう”のお年寄りとの比較 -．日本発達心理学会第 4 回大会発表論文集 ,pp.218（1993）
7）金田千賀子：子どもが抱く高齢者のイメージ．医療福祉研究 ,2,pp.1-10（2006）
8）古谷野亘，児玉好信，安藤孝敏，浅川達人：中高年の老人イメージ - SD 法による測定 -．老年社会科学 ,18(2),pp.147-152（1997）
9）久世淳子：青年（学生）の高齢者イメージに関する一考察．日本福祉大学情報社会科学論集 , 第 1 巻 ,pp.9-12（1997）
10）木村留美子：SD 法による“老い”のイメージについて - 壮･老年期を中心に -．日本心理学会第 54 回大会発表論文集 ,pp.29（1990）
11）Coe RM:Professional perspective on the aged. *The Gerontologist*,7(2),pp.114-119（1967）
12）Green CP：Fostering positive attitudes toward the elderly: A teaching strategy for attitude change. *Journal of Gerontological Nursing*,7(3),pp.169-174（1981）
13）Kahana EF and Kiyak HA：Attitudes and behavior of staff in facilities for the aged.*Research on Aging*,6(3),pp.395-416（1984）
14）Bagshaw M and Adams M:Nursing home nurses' attitudes,empathy,and ideologic orientation.*International Journal of Aging and Human Development*,22,pp.235-246（1985-1986）
15）大塚邦子，正野逸子，日浦瑞枝，白井由里子：看護学生の老人のイメージに関する研究 - SD 法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に -．老年看護学 ,4(1),pp.98-104（1999）
16）奥村由美子，谷向知，久世淳子：高齢者とのかかわり度合いによる痴呆性高齢者のイメージの違いについて．老年社会科学 ,24(2),pp.262（2002）
17）奥村由美子，谷向知，久世淳子：痴呆性高齢者にかかわる専門職がいだくイメージの違いに関与する要因について．第 3 回日本痴呆ケア学会大会抄録集 ,pp.147（2002）
18）古村美津代，中島洋子：健康な高齢者とのふれ合いを通しての実習の学び - 実習記録の分析から -．老年看護学 ,8(1),pp.78 - 85（2003）
19）流石ゆり子，亀山直子：『健康高齢者実習』の意義 - 学生の実習終了後レポートの分析による学習内容の検討 -．老年看護学 ,9(1),pp.65-75（2004）
20）松本啓子，清田玲子，池田敏子，赤木節子，羽井佐米子，高田三千代，松井優子：看護職の考える高齢者の自立に関する意識調査．老年看護学 ,6(1),pp.107-113（2001）
21）Baines S, Saxby P, Ehlert K:Reality orientation and reminiscence therapy - a controlled cross-over study of elderly confused people.*British Journal of Psychiatry*,151,pp.222-231（1987）
22）Jones RG：Experimental study to evaluate nursing staff morale in a high stimulation geriatric psychiatry setting. *Journal of Advanced Nursing*,13(3),pp.352-357（1988）
23）American Psychiatric Association：Practice guideline for the treatment of patients with Alzheimer's disease and other dementias of late life. *American Journal of Psychiatry*,154 (Suppl 5) pp.1-39（1997）
24）野村豊子：回想法とライフレヴュー；その理論と技法．中央法規，東京（1998）
25）奥村由美子，長谷川妙子，三原静，金田貴子，久世淳子，谷向知：回想法グループ実施による介護スタッフへの効果について（The effect of the reminiscence group therapy to the professional caregivers）．国際アルツハイマー病協会第 20 回国際会議抄録集 ,pp.261（2004）
26）Yumiko Okumura, Satoshi Tanimukai, Toshiko Kubouchi, Taira Nagatani, Takashi Asada：Effect to professional caregivers of reminiscence group therapy for the elderly with dementia. International Psychogeriatrics,19(1),pp.344（2007）
27）本間昭：地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査．老年社会科学 ,23（3）,pp.340-351（2001）
28）杉原百合子，山田裕子，武地一：一般高齢者がもつアルツハイマー型認知症についての知識量と関

連要因の検討．日本認知症ケア学会誌 ,4(1),pp.9-16 (2005)

29) 奥村由美子，久世淳子：学生の高齢者イメージ（２）- 認知症高齢者と健常高齢者のイメージに関連する要因 -．日本心理学会第 70 回大会発表論文集 ,pp.1217（2006）

30) 奥村由美子，久世淳子:学生の高齢者イメージ（３）- 医療福祉系大学生への調査より - ．日本心理学会第 71 回大会発表論文集 ,pp.1011（2007）